B’AI Global Forum × CulturIA 共同ワークショップ：Cultural Imaginaries of AI: From technology to art 報告

呉先珍（B’AI グローバル・フォーラム 特任助教）

・日時：日本時間（JST） 2024 年 5 月 13 日（月） 午後 16:00-19:30
　　中央ヨーロッパ夏時間（CEST） 2024 年 5 月 13 日（月）午前 9:00-午後 12:30
・場所：Zoom ウェビナー
・使用言語：英語
・講演者：久野愛（東京大学）
　　Antonio Somaini（Université Sorbonne Nouvelle Paris 3）
　　Galina Shyndriayeva（武蔵大学/ 東京大学）
　　Lionel Obadia（Université Lumière Lyon 2）
　　板津木綿子（東京大学）
　　Pierre Cassou-Noguès（Université Paris 8 Vincennes-Saint-Denis）
　　& Gwenola Wagon（Artist/Université Paris 1 Panthéon-Sorbonne）
・司会：Carla Marand（The Sciences Po Center for History）

2024 年 5 月 13 日に、フランス国立研究機構（Agence nationale de la recherche）の AI 文化史プロジェクト（CulturIA） と B‘AI グローバル・フォーラムの共同ワークショップ Cultural Imaginaries of AI: From technology to art（日本語訳：AI をめぐる文化的諸想像―技術からアートへ）が開催された。本ワークショップでは、AI をめぐる文化的想像や実践に関する考察を歴史学やアート、人類学、社会学の領域において進めている 7 名の登壇者を迎え、ご講演頂いた。ワークショップは 2 部に分かれ、それぞれ 20 分間の Q&A セッションが設けられた。

まず第 1 部では、久野愛氏（東京大学情報学環・学際情報学府/東京大学 B‘AI Global Forum）、Antonio Somaini 氏(Université Sorbonne Nouvelle Paris 3)、Galina Shyndriayeva 氏（武蔵大学/東京大学 B‘AI Global Forum）より、AI 技術と視覚・聴覚等のさまざまな感覚の関係に焦点を当てた講演が行われた。

第一講演者の久野氏は、“Technology as Practice: Body, Materiality, and Aesthetic Intelligence”というタイトルのもと、AI 技術を導入した現代の知覚科学がどのように人びとの美学的な経験、すなわち、知覚・身体的で政治的な生の領域全般を変えているかについて報告した。久野氏は、身体を獲得することが知覚・感覚的な的媒体としての世界を生成する創造的な営みであることを議論の前提として据えたうえで、以下のことを指摘した。従

来の知覚科学が、AI 技術の導入とともに知覚パネリストたちの感覚的身体の獲得を前提としていたのに対して、知覚パネリストに代わる AI においては、身体が不在したままにアルゴリズム的可能性に基づいて人びとに何かを感覚させ、人びとの考えや身体に影響を与える方法を身につけるといった違いがみられる。久野氏は、AI アルゴリズムを用いて仮想現実をよりリアルなものに感じられる嗅覚情報を提供できるようになった近年の VR マシンを例にとりあげ、技術史的な分析を施している。ＶＲマシンは、その母体となる 19 世紀のパノラマ、20 世紀のセンソラマ技術との比較において、他者との共在や現実的な文脈における主体＝身体の獲得から、文脈や時間を喪失した専ら空間的な仮想現実、「浮動している記号（floating signifier)」を眺める一つの視点への身体の還元という変容をもたらしている。久野氏は、このような変容を AI 時代の新たな身体の獲得の仕方として記述し、知覚可能なものの分布と人びとの知覚・感覚・身体的な経験から当面の社会構造や暗黙的な慣習等を浮き彫りにする視点へ開くことを要請しつつ、講演を結んだ。

次いで、第二講演者の Somaini 氏は、“The Visible and the Sayable. On the Biases of Text-to-Image Models and the Strategies to Counter Them”というタイトルで、AI アルゴリズムがどのようにしてイメージと言葉、あるいは、見えるものと言えるもののあいだの関係性を再組織化しているかについて論じた。Somaini 氏は、AI という広大な領域に属す一連のアルゴリズムとモデルが、現代の視覚文化の技術的転換をもたらしていることを指摘し、これに対する批判的省察や芸術による応答が求められるとしている。マシンビジョンシステムにおいては、何が見えるかは何が命名できるかにかかっている。たとえば、プロンプト入力によって画像やビデオを出力する際に、何を視覚化できるかは、何が書けるかに依存する。ここにおいてテキストとイメージは、アルゴリズム的な仕方でつなぎ留められている。Somaini 氏は、暴力的な画像や映像の出力を防ぐために設定されてきた禁止プロンプトと特定のデフォルト値、検閲された画像などに言及し、イメージを生成する AI モデルを管理する様々なフェーズが大きな政治的含意を内包していることを指摘する。なかでもとくに注目すべきは、すべての生成 AI モデルが新たなデータを生成する場である潜在空間の存在である。潜在空間において、生成 AI モデルはデジタルオブジェクトを数値ベクトルに変換して、それらの基礎的なパターンを学び、それに基づく新しいデジタルオブジェクトを生成する。このため潜在空間は多次元的、抽象的、非直感的、知覚と想像が不可能という特性をもつ。Somaini 氏は、アーティストによる潜在空間への応答として、a.オンラインでアクセス可能な膨大な画像フィールドに新しい画像を注入することで、それが潜在空間に埋め込まれ、視覚化される方法をコントロールできる可能性を高める、b. 既存の潜在空間の存在論的な景観に存在しなかった実体を新たに導入する、以上の二つに該当する事例を紹介し、ますます多くの文化の処理、探求、変革が潜在空間に還元されることに対する批判的な視点を明確にした。

次に、Shyndriayeva 氏は、“Automating Creativity: Artificial Intelligence in Perfumery and Design”というタイトルのもと、クリエイティブ産業の一分野としての香

水産業におけるAI利用の具体的な事例をとりあげ、AIの使用がもたらした変化を創造性の自動化という観点から考察している。20 世紀初頭において香水の製造は、人のパピューマーの手に委ねられていたが、当時のパピューマ―たちは繊細に磨かれた本能や芸術的な感覚を頼りに様々な原料に当たる一方、そうした芸術の土台についての体系的な知識を備えていなかった。しかしその後、香水産業は好き嫌いや快感・不快感を分類・測定・予測する科学的なシステムを構築し、主観的感覚を客観化してきた。Shyndriayeva 氏は、このような香水産業における客観化傾向が近年どのように展開しているかを、３つの主要なAIパピューマーに対する開発者と利用者のパピューマーたちの言説を通して概説した。これらの言説においては、AI パピューマーが、あくまで人間のパピューマーのクリエイターとしての仕事から単純作業を省き、能率化する役割を担うものとして描写されており、香水を構成するのは必ずしも純化された化学物質でないからこそ、なおもパピューマーの主観性の領域においてのみその質を適切に判別できるものという認識が共有されている。

Ｑ＆Ａセッションでは、機械によって生成されたデータが潜在空間に取り込まれることに対する予想される帰結や生成AIに身体的な経験が不在することの将来的な影響、知覚できないものや言葉にできないものの表現可能性に対してAIが及ぼしうる影響などについての質問が寄せられ、白熱した議論が交わされた。

次に第２部では、AIを主題とする人間による表象、あるいは、AIによって生成された表象に焦点が当てられる。表象をめぐる議論をリードした登壇者は、Lionel Obadia 氏(Université Lumière Lyon 2)、板津木綿子氏（東京大学情報学環・学際情報学府/東京大学B ‘AI Global Forum)、Pierre Cassou-Noguès 氏(Université Paris 8 Vincennes-Saint-Denis）とGwenola Wagon 氏(Artist/Université Paris 1 Panthéon-Sorbonne)である。

第２部の第一報告者のObadia氏は、“‘Official’ Aesthetics and Narratives of AI in Contrast: Comparing Japan and France”というタイトルで、AIをめぐる技術開発に関してフランスと日本の技術博物館が示す「公式」の表象と態度の比較を通した考察を発表した。

Obadia氏は、ロボット工学やソフトウェア開発のグローバルな標準化傾向が著しいなか、このような標準化傾向が果たして異なる文化圏における多様な美学的表現を消し去り、われわれのしまう世界を単一の技術文化のもとに集約させているのかについての批判的な考察の一環として日本とフランスの技術観の比較を位置づける。日本は宇宙論的な見方とアニミズムへの親和性の高さから技術親和的な態度を、フランスは同様の文化的・宗教的背景に由来する異なるレパートリーとして技術不信的な態度を形成していると言われてきたが、これらは往々にして過度な単純化や一般化をともなっている。技術博物館（日本では日本科学未来館、フランスではシテ・デ・サイエンス）の言説の比較においては、日本では技術がもたらすだろう生態系と社会への貢献の具体像が積極的に示されているのに対して、フランスでは、AIへの両価的な態度が示され、AIの普及がもたらしうる潜在的な危険についての周知がなされ、技術史への回顧や反省に依拠して新技術の慎重な展望が示されている。Obadia 氏は、両国の技術をめぐる表象には、類似したシンボルが用いられながらも顕著な

対比がみられることを指摘し、文化本質主義に走ることなく、これらの文化的差異を注意深く検討する人類学的研究が求められるとした。

第二報告者の板津氏は、“To love and be loved: Tales of the Fictoromantic”というタイトルのもと、アニメや漫画の登場人物や、AI 技術によるアバター等へのロマンティックな惹かれを表す造語であるフィクトロマンティックについての考察を報告した。架空の存在への一方的な恋愛と結婚を決めた人々の語りにおいては、人間関係の複雑性や苦痛から解放され、親密的な関係を思い通りにコントロールできることが、フィクトロマンティックな関係を結ぶことのメリットとして挙げられている。多くのフィクトロマンティック経験者や研究者らは、人間同士の親密的な関係から受けたトラウマを癒す効果をもち、人間同士の親密的な関係をほとんど代替できるものとして見なしている。板津氏は、これらフィクトロマンティックの順機能を強調する立場が顕著であることに対立する立場として、当該の現象を社会・経済的な諸関係からの逃避や反社会的行動として解釈する Patrick Galbraith の議論を挙げている。板津氏によると、Galbraith の議論は当該現象を社会からの逃避や後退として読むことで、背景となる社会・経済構造の病理を不可視化してしまう恐れがある。これに対して板津氏は、フィクトロマンティックへの傾倒は、人びとが美醜をバロメーターにしてますます自己と他者を商品化する、高度な資本主義社会を反映している側面があるとし、歴史を映し出す鏡として人びとの内面の変化を読む必要性を強調した。

最後に、Cassou-Noguès 氏と Wagon 氏による“Uncanny homes: living in AI”と題された報告では、Dall-e と Midjourney で生成した画像を使って、生成 AI が時に生み出す不気味さを探るいくつかのアートプロジェクトについての紹介がなされた。一番目のプロジェクトは、Dall-e で生成された不動産広告のイメージについてである。AI が生成した住宅の画像に焦点を当てることは、大雑把で注意を払われない特定の感情的内容がいかにして投影されるかを浮き彫りにする。というのも、人間が住宅へ向ける注意は、フィクトロマンティックなどにおいて視覚化されるような、他の人間や他の生物に対して投影する細部まで明確に認知された諸内容とは性質が異なる。AI によるイメージの出力の不気味さからは、まさにこういった普段私たちが注意深く観察しないものの、それでもなお私たちが一定の感情的な内容を投影する住居といった対象に対する私たちの慣れ親しみの感覚への省察が得られる。Cassou-Noguès 氏と Wagon 氏は、この他に、第３次世界大戦という架空の状況を生きた人物の視点から展開される物語で、すべてこれまでの人間の記憶の集積から AI が生成したイメージで構成されているインスタレーション動画 Chronicles of the Dark Sun や火災の被害地域の歴史の年代記を AI に生成させた作品 Anarchives of the fire について紹介した。これらの動画や画像は、生成 AI が雰囲気を抽象化し、全く異なる内容で再現する能力を通じて、馴染みのあるものに対して私たちが馴染みをなくす原理を深く探求するきっかけを提供している。

Ｑ＆Ａセッションでは、AI が故人の存在を代替しグリーフケアにつながる可能性、AI サービスとのロマンティックな関係を促進するマーケティングや商業戦略の役割、AI が作り

出す画像やテキストは「虚構」か、データセットの平均から少し「ずれた」代替的な願望とみるべきか、Anarchiveの画像を統計グラフなどに変換し、込められた環境危機についてのメッセージをより説得力のあるものにすることができるのではないかなど、様々な視点からの質問が寄せられ、活発な議論がなされた。